

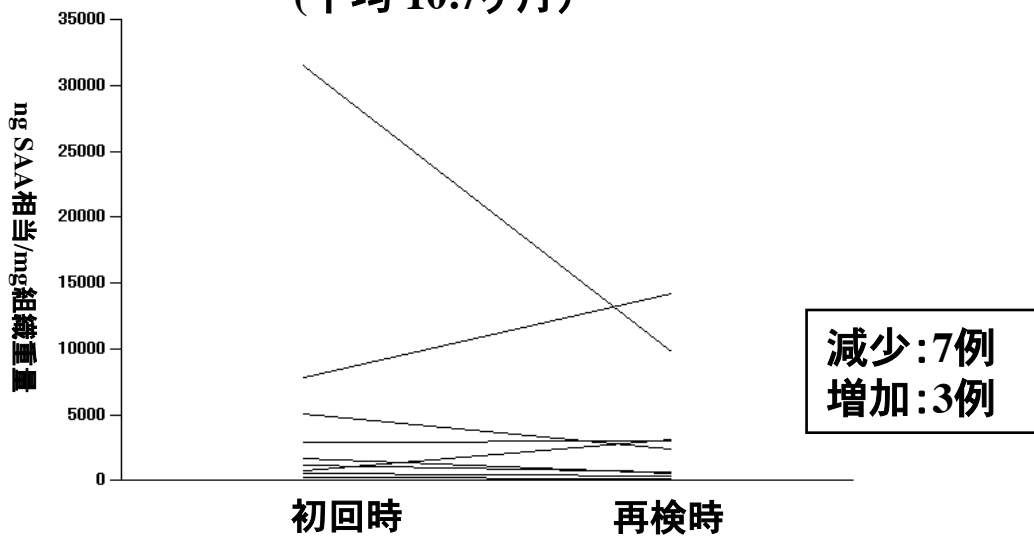
消化管アミロイドA定量による臨床的評価と有用性

研究分担者：道後温泉病院リウマチセンター内科 奥田恭章

表. もっともAA沈着が認められた部位 (n = 32)

十二指腸球部	十二指腸第二部	胃前庭部
19	12	1

図.AA定量値の推移(n = 10)
(平均 10.7ヶ月)



解 説

1. AA定量生検の部位別検討より、十二指腸生検がもっとも感度が高く、アミロイド進行の評価に適していることが証明された。
2. SAAの値を正常に保った2例は、AA沈着量はそれぞれ、68.9% (12ヶ月経過)、44.0% (12ヶ月経過) 減少し、eGFRの悪化を認めなかった。
3. AA定量値悪化の3例は、平均SAA値は、それぞれ、25.6, 21.8, 123.7であった。悪化因子として2例は観察期間後半の疾患活動性上昇、1例は、SAA1.3ホモ、2例はSAA1.3ヘテロであることなどが想定された。
4. 一方、平均SAA値が比較的高値の例においても、AA定量値改善、eGFRの安定化症例も認め、個々の症例でのAAアミロイド進行のSAA閾値は異なっていることが示唆された。